

アクション・リサーチのまとめ

学校名 関高等学校
研究年度 19 年度 研究対象 (学年) 1年 生徒数 321 名
科目名 英語 I 単位数 3 使用教科書名 「UNICORN ENGLISH COURSE I」(文英堂)
副教材 「英作基本英文例 600」(啓隆社) 週 3 回小テストに使用
授業形態 クラス単位 (計 40 名)
科目名 オーラル コミュニケーション I 単位数 3 使用教科書名 「Departure」(大修館)
副教材 「MAIN TOP」(山口書店) 週 2 回使用
「システム英単語」(駿台文庫) 週 3 回小テストに使用
授業形態 2 クラスを 3 分割 (80 名を 3 分割、習熟度別)

学年の様子・特徴

生徒の学力の幅が広く、全国偏差値（進研模試）では 83～34 までの開きがある。

問題の特定

1. 語彙力の不足と基礎的文法知識の習得途上であることから、読解力不足である。(高校入学以前の英語学習において、ある程度の分量を伴う語句等を暗記することに慣れていない。)
2. 予習・復習を含む家庭学習の確保、小テストに対する取組、提出物等の基本的な事項の徹底ができていない。
3. 学習活動が消極的で、音読に自信がない。

現状把握

A 授業観察

- ・ 週 3 回の単語テスト（1 回 20 単語ずつ）では合格するが、範囲が広い定期考査・実力テストでの単語に関しては点数が取れない生徒が多い。
- ・ 下位層の中には、何をどのように取り組むべきか、学習方法が分かっていない生徒も少なくないように思われる。
- ・ 一文一文の意味は理解できても、パラグラフ・パート・レッスン全体の意味の把握ができない生徒が多い。
- ・ 苦手意識があり取り組みが消極的な生徒も少なくなく、音読活動が十分できないクラスもある。
- ・ 週末課題、小テストの追試等を期日までにできない生徒がいる。

B GTEC

Reading：生徒の習熟度に関して幅広い層がある。特に下位層が例年より多い。

Listening：幅広い層がある。初期指導が必要である。

C 質問紙調査

学ぶ側…家庭学習時間の確保が十分にされていない。

教える側…「読むこと」オーラルイントロダクション、多読が行われていない。「書くこと」十分な量を書かせていない。「聞くこと」導入方法に工夫の余地がある。「話すこと」プロダクション活動を取り入れていない。「総合的な活動」概要・要点把握、要約等の出口の活動に取り組めていない。

リサーチ・クエスチョン

語彙力の伸長によって読解力が向上するのではないか？

仮説・実践・検証

仮説 1

全ての生徒に基本単語 1500 語を習得させるために月例単語テスト「Word Marathon」を実施することによって、語彙力が向上するのではないか。

実践 1

授業で行う週 3 回(1 回 20 語)の単語テストに加え、月 1 回(1 回 100 語以上)「Word Marathon」を行い、合格点を 80 点に設定し、不合格者は合格するまで取り組むように徹底する。

検証 1

計 4 回実施した。生徒の間にも定着し、積極的に楽しんで取り組む生徒も多かった。合格するまで徹底したことにより、苦手な生徒も達成感を味わうことができた。

仮説 2

クラス編成を習熟度別、A(30 人)、B(30 人)、C(20 人)にすることによって、語彙指導の効果が高まるのではないか。

実践 2

単語テスト実施方法を習熟度に合わせる。A(1 回の単語数を多くし、派生語等も出題する)C(単語数を少なくし、1 つずつ確実に覚えさせる)

検証 2

習熟度が高いクラスでは派生語・反義語等、語彙をより広げることができた。一方、暗記が苦手な生徒も、習得可能な目標の設定により、あきらめることなく積極的に取り組むことができた。

仮説 3

単語テストの方法を工夫することによって、語彙力が向上するのではないか。

実践 3

- ① 単語テストの出題・単語の読み合わせをコロケーションで行う。
- ② 難度の高い単語に関しては頭文字を提示する。

検証 3

コロケーションで覚えることにより、単語を覚えることが容易になったと同時に語彙も増やすことができた。

リサーチ・クエスチョン

「聞く」「話す」場面を設定することによって、コミュニケーション能力が向上するのではないか？

仮説・実践・検証

仮説 1

週 1 回の ALT とのチームティーチングでスピーキングラインを実施することによって、「聞く」「話す」積極的な態度を育成することができるのではないか。

実践 1

身近なトピック(関市・家族・日本の正月等)でスピーキングラインを行う。スピーキングライン*に取り組む前に、各トピックに対しブレインストーミングをグループで行う。

検証 1

ブレインストーミングによって、語彙が増え、自信をもってスピーキングに取り組むことが可能となった。生徒同士でリラックスした状況で話し・聞くことができた。

*スピーキングライン…生徒を Speaker 列と Listener 列に分け、Listener が提示する Topic について Speaker は約 1 分話す。” Move!” の合図で Speaker は全員同時に隣に移動し、次の Topic について話す。(これを繰り返す)

仮説 2

朝リスニングを実施することによって、英語学習に対する意欲が高まるのではないか。

実践 2

朝のショートホームルームの 10 分程度を利用し、1 週間実施した。

検証 2

最終日にアンケートを実施したところ、結果は次のようでした。

質問	Yes	No	?
やってよかったと思いますか?	80%	2%	18%
またやりたいですか?	58%	12%	30%

「自分でなかなか出来ないのでもっと学校でやってもらえるのはよい」「リスニングに慣れるためにももっとやりたい。」という意見が多かった。

リサーチ・クエスチョン

概要・要点把握、要約等の「総合的な活動」を取り入れることによって、定着・習得が促進されるのではないか。

仮説・実践・検証



仮説 1



実践 1



検証 1

各レッスンの始めにレッスン全体を把握する速読を取り入れることによって、読解力が向上するのではないか。

レッスン全体を読ませて質問に答えさせることにより、概要・要点把握の力を養う。

内容理解に必要な情報を得るために、レッスン全体の構成や、パラグラフの成り立ちに注意して読むことができたようになった。

仮説 2



実践 2



検証 2

レッスンの最後に要約等の「総合的な活動」を取り入れることによって、学習した内容がより定着するのではないか。

レッスン全体の要約文（穴埋め）を完成させる。
Step 1.内容を思い出して。 Reading
Step 2.全文を音声で聞いて。
Listening
g
Step 3.全文を読みながら。 Reading
Step 4.答えを音声で確認する。
Listening ,Dictatio
n
Step 5.Oral Summary をペアワークで行う。
Speaking

内容・各レッスンの文法事項の **Key Word** となる語を空白にした要約文を利用することにより、内容理解と同時に文法事項の確認も行うことができた。
また、**Oral Summary** においても、**Key Word** と同時に、使用してほしい文法事項を指定することにより、生徒も習得すべき力、目標を意識して取り組むことができた。

研究の成果

読解力を高めるために、語彙を増やすことを目標とし、積極的に取り組んだ。月例単語テストを定期的に行うことで、生徒自身も目的意識をもって主体的に取り組むことができた。外部模試、実力テスト等の長文の意味がなんとなくわかるようになり、語彙の重要性を実感する生徒も少なくなく、自主的に継続し語彙を増やそうとする姿勢が多く見られるようになった。また、授業における小テストで1つずつ確実に暗記し、月例単語テストによってもう一度範囲を広く確認することによって語彙の定着率は高くなったと思われる。また、「**Oral Communication I**」の授業において「聞く」「話す」場面を多く設定することができた。



今後の課題

来年度は今年度取り組んだ語彙（**Word Marathon**）を生かした多読（**Reading Marathon**）に積極的に取り組む。教材の精選、多読の場の設定等、「**英語II**」の授業における効果的な多読の進め方を検討する必要がある。また文法事項に配慮しながら適切に「書く」ことができる力を養うために、「**ライティング**」の授業で十分な量の英語を書く状況を計画的に設定していくことが必要である。来年度は「**Oral Communication**」の授業がなくなるので、どの様に「聞く」「話す」場面を設定するかを考える必要がある。朝リスニング等を定期的に取り入れ、「聞く力」の定着につなげていきたい。